

## 論文の内容の要旨

論文題目 「中華民国」 国宝の政治史  
——国境の創出と隠蔽をめぐる力学

氏名 家 永 真 幸

本研究は、「故宫文物」および「パンダ」が中国で「国宝」と呼ばれるようになる歴史の経緯および、今日に至る両者の政治的役割の変遷を明らかにすることを通じ、「国宝を国宝たらしめている力学」を剔出する試みである。

本論が言う「故宫文物」とは、1925年に清朝皇室のコレクションを一般公開すべく北京で成立した「故宫博物院」および、1965年に台北で成立する「国立故宫博物院」が所蔵する文物の総称である。この「故宫文物」と珍獣「パンダ」は、ともに歴史的現象として、大陸時期の中華民国政府によって「国宝化」が進められた中国のシンボルであった。しかし両者の間には、片や台湾に持ち込まれたのに対し、片や持ち込まれなかったという相違が生じた。

これら「国宝」を創出した中華民国は、「領土」と「国民」の境界線に関し非常に込み入った経歴を有する政治体である。同国は1949年を境に中国大陸から空間的に断絶しつつも、台湾海峡を跨いで連続するとともに、台湾においては国際冷戦下の分断国家問題を争い、近年では政治構造の「台湾化」という局面を迎えている。このような来歴を持つ中華民国の「国宝」たる故宫文物とパンダの扱いは、近100年来の東アジアの歴史においてたびたび政治争点となってきた。

故宫文物がいかにして「中華民国のシンボル」となったのかについては、従来の研究でも検討されてきた。しかし、中華民国の歴史の中で「国宝」と呼ばれるようになったのは、古来収集の対象とされてきた故宫文物のような、歴史的に重視されてきたものばかりでは

ない。この視点は、先行研究の蓄積の中で完全に欠如していた。

これに対し本論は、パンダが中華民国によって初めて「中国」という国家を象徴する役割を与えられたことを、未公刊史料より実証した。この発見により筆者は、2000年以降の台湾において政治的争点となった「故宮文物」と「パンダ」はいずれも、中華民国によって新たに政治的地位を創造された「国宝」であるという視角を得た。そこで本論は、故宮文物とパンダがいかにしてその地位を獲得し、その後の歴史の中で政治利用されてきたのかについて、両者を「並置」して「通観」することによって、「国宝を国宝たらしめている力学」を剔出できるのではないかと考えた。

この目的を達成するため、本論は、「故宮文物」および「パンダ」の意義づけに関わる政治的言説を史資料から確認し、その変遷を分析するという方法をとった。資料としては、主に公刊史料集および関係者の回想録、各時代の新聞報道や政府公報類のほか、可能な部分については台湾や中国の史料館で公開された未公刊の行政文書を参照した。

故宮文物とパンダはこれまでの歴史の中で、大きく2度の文化触変に巻き込まれていると捉えることができる。1度目は19世紀後半以降顕著になる西洋文化との接触に伴う、とりわけミュージアム概念の受容をめぐる中国文化の変化である。2度目は1949年の中華民国の移転後に発生した、とりわけ中国文化の位置づけに関する台湾政治の変化である。この観点に基づき、本論は全体を以下に示す2部構成とした。

第1部「中国の近代国家建設と国宝形成」は第1、2、3章から成り、19世紀後半以降の西洋文化との接触を経て、故宮文物とパンダがそれぞれいかにして中華民国のシンボルとなっていったのかを論じた。

第1章「ミュージアム概念の『非植民地型』受容——清末中国における博物館発展史(1840s-1907)」では、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、清末期の中国社会がいかにして外来のミュージアム概念に価値を見出し、そのような施設・制度の導入を試みたのかを検討した。これにより、中国は「博物館」をめぐる思想を主体的に打ち立てたわけでもないが、植民地としてその概念をもたらされたのでもないという意味で、「非植民地型」とも呼ぶべき博物館受容を遂げたことを確認した。

第2章「伝統の再発見——中華民国による皇室コレクションの国宝化(1900s-1936)」では、清末から中華民国期にかけて、清朝の宮廷コレクションがいかにして博物館化され、ひいては国宝と呼ばれる地位を獲得するに至ったのか、その経緯を論じた。それらコレクションは中華民国の下で、清朝による所有および実用からのみならず、従来の保管場所からも引き離された。また、清末期以来の「流出」により経済的価値を帯びつつあった同コレクションは、共和国の博物館の収蔵品となることで、改めて美術市場から隔離されることになった。このように、清朝皇室コレクションは、それまで置かれてきた様々な文脈から切り離された上で、後に台湾へと運ばれていくことを本章では確認した。

第3章「近代的シンボルの創出——南京国民政府期における『パンダ外交』の形成(1928-1949)」では、南京国民政府が1930年代後半から1940年代にかけて、パンダが中国

の対外的なシンボルとなっていく過程、いわば「パンダ外交」の形成過程を論じた。ここでは、1930年代後半から40年代にかけ、中国国民党はパンダに対し、中国が「文明国」としての価値観を備えていることを示すとともに、二国間の友好関係を演出するためのシンボルとしての役割を見出したことを明らかにした。また、パンダの外交上の利用価値は、1940年代末には行政府内で広く認識され、正式な外交ルートも「パンダ外交」に関与するようになったことについても明らかにした。併せて、パンダを海外に贈るという事業は、当時の戦争の形態や国際的な規範に照らすときわめて合理的な戦術選択であったことを確認した。

第2部「分断国家の国宝をめぐる中台関係の展開」は第4、5、6章から成り、台湾に持ち込まれた故宫文物および大陸に残されたパンダが、それぞれ1949年以降の台湾海峡兩岸の関係をめぐる地域政治、国際政治の中で、どのような争点を形成してきたのかを論じた。

第4章「国際冷戦体制下の文化内戦——故宫文物をめぐる国共対立の展開(1936-1971)」では、中華民国の国民党政府が台湾に持ち込んだ故宫文物が、台湾海峡を挟んだ国共両党間の対立の中で、どのような政治的役割を演じていたのかを論じた。ここではまず、故宫文物は台湾に持ち込まれた後も、中華民国の国宝として保護が重視されるとともに、国民党政権は二国間の政府レベルでの交流事業として、その海外出展の実現を模索していたことを明らかにした。また、これに対する共産党政権の反応より、台湾海峡兩岸の政権は互いに相手が実質的に統治する土地を軍事力によって奪取することが困難な現実の下、「故宫文物は中国国家の公的な財産であり、故宫文物の保護者こそが合法中国政府である」という論理は共有していたことを確認した。併せて本章では、台湾住民への故宫文物の公開は、1960年代半ばに至るまで、比較的軽視されてきたことも確認した。

第5章「文化内戦の脱冷戦化と国際レジーム化——中華人民共和国による『パンダ外交』の継承(1949-2011)」では、1949年に成立する中華人民共和国が、今日に至るまでの間、パンダをどのように政治利用してきたのかを論じた。本章ではまず、1950、60年代の同国政府が、対米、対日民間外交を重視しつつも、パンダ誘致に対しては相手国が中華民国と断交し、中華人民共和国を政府承認することなしには応じなかったことを明らかにした。また、80年代には「ワシントン条約」という稀少動物の二国間「越境」を監視する趣旨の国際レジームを中華人民共和国が受け入れた結果、パンダは一層「中国」を象徴する意味合いを強めたことを指摘した。

第6章「分断の解消、肯定、迂回をめぐる力学——『台湾化する台湾』における中国国宝問題(1971-2014)」では、台湾において「中華民国の台湾化」とも呼ぶべき政治変動が起こる中、故宫文物とパンダをめぐる政治問題はどのように変質しているのかを論じた。ここではまず、故宫文物やパンダが政治権力によって「公開」され、適切な科学技術によって「保護」されなければならないとする認識は、台湾海峡兩岸で1980年代以来今日に至るまで、一貫して共有されてきたことを指摘した。同時に、それら「中華民国国宝」に歴史的に付与されてきた「その移動により国境の存在の有無を明示する」という役割は、国

際政治上の台湾問題の変質および台湾における政治変動にともない、次第に曖昧化されつつあることを確認した。

以上の議論を通じ、本研究によって明らかになった第 1 点は、故宮文物およびパンダという「国宝」は、その移動が常に「国内移動」なのか「国際移動」なのか問われるようになったことから、国家の領土や国民の範疇がどこからどこまでなのか、その境界線を象徴する政治的役割を獲得したということである。

第 2 点は、近年の台湾の政治変動の中でも、移動によって「国境」の存否を政治問題化するという、故宮文物およびパンダの歴史的な性格は維持されている一方、それを超克する試みも見られているということである。これに基づき本研究は、今日の台湾が迎えている局面に歴史的な画期性を見出せるか否かは、国家の領土と国民の境界線を象徴する「国宝」の役割そのものを変容させることで、「その国宝が象徴しているのはどの範囲の領土と国民なのか」という従来の対立を、一段高い次元で解消することができるか否かにかかっていると指摘した。

総じて、遠い場所にある古い美術品の破壊や、動物の絶滅を心苦しく思い、人類の制御下に置きたいと願う、西洋史家の松宮秀治の言う「ミュージアムの思想」に相当する価値観こそが、ある国家があるモノを排他的に管理することを正当化し、そのモノの移動が国境を越えたか否かを政治問題化してきた。この歴史的現象を、本研究は中華民国の「国宝」をめぐる政治争点の変遷をたどる中から析出し、これを「国宝を国宝たらしめている力学」と結論づけた。